

安曇誕生の系譜を探る 試論

平成 18 年

金井 恂

安曇誕生の系譜試論 目次

はじめに

第1編 郷土史家たちの見解

第1章 「信濃国安曇族の考古学的一考察（大場磐雄）」を読む

第2章 『穂高神社史』（宮地直一、穂高神社）を読む

第3章 「安曇氏の信濃国安曇郡への定着について」（小穴芳実）を読む

第4章 「信濃の安曇」（笹川尚紀）を読む

第5章 「安曇氏入信に係る考古学的証明」、「信濃の海人族」、
「古代安曇郡に観る漁労民の問題」（桐原健）を読む

第6章 『信濃安曇族の謎を追う』（坂本博）を読む

第2編 弥生時代のはじまりと安曇郡・信濃国設立時期

第1章 水稻栽培のはじまりと弥生人の進出

第2章 信濃国成立、安曇郡設立の時期についての考察

第3編 安曇の弥生時代遺跡

第1章 黒沢川右岸遺跡

第2章 滝の台遺跡

第3章 穂高町の遺跡

第4章 町田遺跡

第5章 緑ヶ丘遺跡、ほうろく屋敷

第6章 大町市の遺跡

第4編

安曇誕生の系譜の考察

はじめに

[安曇誕生の系譜]

安曇に生きた人々を仮に「安曇人」とすると、その安曇人はいつ、どの様にして誕生したのだろうか？ われわれの祖先は一体どの様な人だったのか？ これは、単なる知的興味に過ぎないかもしれないが、安曇人の祖先の姿を探り「安曇」誕生の系譜を明らかにすることは、安曇野市誕生に合わせて意義深いことと思う。この問題を安曇平および松本平の人々の間で広く論議したらどうかと提案するものである。

[弥生人の安曇進出と弥生文化のはじまり]

現在の我々の文化は水稲栽培文化＝弥生式文化を基盤とするものであり、従って安曇誕生は水稲栽培文化の始まる時点とすることが妥当である。つまり、狩猟採集文化に基づいた縄文時代から転換し、水稲栽培文化に基づく弥生時代のはじまりが安曇誕生といえる。水稲栽培文化は弥生人によってもたらされた。一方、古くから安曇の山麓沿いに居住していた縄文人は弥生人集落に集まり、弥生文化を吸収し同化していった。そして弥生人と縄文人の種族的融和が起り、その結果安曇人が誕生したと考えられる。このことは、大陸から日本列島へ渡来してきた弥生人と、古くから日本列島に住んでいた縄文人との融合によって日本人が誕生したことと全く同じ現象である。

従って、安曇誕生の系譜を明らかにする第 1 の課題は、弥生人たちが安曇へはじめて進出してきた時期と状況を明らかにすることである。

[安曇氏と弥生人の関連]

これまではこのような弥生人視点とは異なって、安曇氏に着眼して安曇氏の安曇進出はいつの時代か、どのようなルートを辿って来たのか、何の目的で来たのかということがさまざまに論じられてきた。それは、安曇郡の建郡当時、安曇氏がこの地域に勢力を張っており、その氏族名を付けて建郡されたと考えられているからである。この建郡事情は国内で唯一の事例であり、多くの研究者の一致する見解である。

そこで安曇誕生の系譜を明らかにする第 2 の課題は、前述の弥生人たちと、安曇氏との関わりはなにかを解き明かすことである。

[課題への取り組み]

このような視点に立って、安曇郷土史界の優れた先輩達の論文・著書および日本の古代歴史書を考察し、さらに安曇にある弥生時代遺跡遺物を検証してみる。筆者はこれまで私的な研究会を作って勉強してきた門前の小僧にすぎないが、先入観にとらわれることなく合理的な推論に基づいて安曇誕生の系譜を考察して見ようと考えている。読者諸氏のご批判を仰ぐと共に、さまざまな論議が巻き起こることを期待するものである。

第1編 郷土史家たちの見解

第1章「信濃国安曇族の考古学的一考察（大場磐雄）」を読む

[大場磐雄氏]

大場磐雄氏は『信濃』（昭和24年5月号）に「信濃国安曇族の考古学的一考察」と題する論考を発表し、安曇誕生の系譜を論じている。大場磐雄氏は郷土史における優れた大先輩であり、本論考は安曇誕生問題の要所について丁寧に考察しているので、この論文から読み進めることにする。

[安曇族の分布と銅鉾銅剣の分布]

安曇郡が安曇氏の氏族名をもって建郡されたと言うことはすでに定説である。安曇氏は福岡県糟谷郡安曇郷、志珂郷（志賀島地域）を拠点としていた氏族であり、海人族と呼ばれている。その安曇氏がいつの時代に安曇へ進出してきたのかが問題である。大場氏は「元来海洋に親しみ、海辺を伝って移住したと考えられる安曇族が、如何なる理由を以ってかかる山国へ遷居したかは、誠に一の不思議と言うべきである。さらにこの奇異な現象が文献には全く記されていない」と述べている。

大場氏はかつて銅鉾銅剣の分布を考察して物部氏と密接な関係があることを見出したが、安曇族についても同様のことが言えると主張する。日本海沿岸地域について見ると、長門国、出雲国、伯耆国、丹後国にわたって、安曇族が居住していた地域が多数分布しており、そこで銅剣、石剣が弥生式土器と共に発見されているのである。

次に大場氏は、丹後国から北の地では銅剣類の発見はないが越後国中頸城郡潟町において石戈と石剣が発見されていると指摘している。越後国西頸城郡には青海市があり、ここは青海氏の拠点であり、「新撰姓氏録に青海首は椎根津彦命之後也とあるから、同じく安曇の一派と見ることが出来る」とし、安曇族が日本海に沿って北上したことを立証できるとしている。

しかし、この点に関しては疑問がある。他の研究者たちによれば、海人族は阿曇系と宗像系および大和系に分類でき、青海氏は大和系に属している。すると安曇族とは別氏族である。また、この頃越後国は蝦夷の居住地であり、弥生人である安曇族が入りえたのか疑問である。従って安曇族が山陰地方の日本海沿岸地域に進出したとしても、さらに北上して越後国まで来ていたとは考えにくいのである。

[北安曇郡平村海上諏訪社の銅戈と安曇族の進出]

大場氏は北安曇郡平村海ノ口の上諏訪社には銅戈が神宝として所蔵されていることに着目している。前述の銅剣石剣の分布と合わせ、安曇氏がこの地に来たことの証であると考えたのである。越後国西頸城郡地域へ進出した安曇族が、姫川溪谷の硬玉原石を求めて、姫川を遡行して行き、そして木崎湖の近くの平村海ノ口付近にしばらく滞在したという。

しかし平村海ノ口上諏訪社の銅戈に関しては、その発見地が不明であること、そしてこの祠官が越後国西頸城方面から持参したのではないかとする疑問がある。大場氏はこの疑問を認識した上で、たとえそうだとした場合でも姫川の流域で得られたものであり、安曇族が

平村付近まで来たことの証であるとしている。しかし、この主張は他の研究者達からの賛同を得ていない。

[安曇進出の魅力はなにか]

大場氏によると、安曇族は平村付近にしばらく滞在したのち、さらに安曇平南部地域へ移住したことになる。

ここでまた疑問が出てくる。弥生時代後期から大町市借馬付近において集落が営まれていた。つまり、大町市借馬付近は定住するに適した地域だったと考えられるのである。そこを通過して当時森と林であった穂高地域へ向かったのはなぜかという疑問である。

[安曇進出のルートと時期]

大場氏は安曇族の進出ルートについて考察し、東海地方の尾張・美濃、三河方面から進出するルートに関して、この頃諏訪地方は諏訪族の分布地域であり、安曇族がそこを通過することは困難であったとしている。そして消去法で絞った上で、日本海から姫川を遡行するルートが最も有力であるとしている。

一方、安曇族の分布地において銅剣石剣が弥生式土器と共に出土していることから、移動の時期は弥生式時代に属していたと主張している。これは非常に重要な指摘である。とすると、安曇族の進出時期は諏訪族が定着し勢力を張るよりも以前のことと考えることができる。その結果として、大場氏の説とは異なり、東海地方から伊那、諏訪そして松本を経て安曇へ来るルートが非常に有力になる。

弥生人が信濃国へ進出した時期は、最近の科学的な考古学的調査研究によると弥生時代中期前半であり、安曇族の信濃進出もこの頃と考えられる。この点は重要な認識であり、『日本人はるかな旅（全5巻）』（NHKスペシャル「日本人」プロジェクト編）に詳しいので、後述で詳細にみることにする。

[安曇族の信濃国への進出と安曇への進出]

安曇族は信濃国の更科・埴科・小県郡にも分布しており、彼等がどのようなルートで進出してきたかということも考えなくてはならない。大場氏は安曇平の海人族の一派が犀川を下って善光寺平へ入り、そこで定着し勢力を拡大したのであろうと推測している。

しかし、弥生人たちは美濃・尾張方面から先ず伊那谷地方へ入り、諏訪地方へ至り、そして佐久平・善光寺平方面と松本平方面へ別々に進出した。そしてさらに碓氷峠を越えて群馬県、埼玉県方面へ進出して行ったのである。

この弥生人達の進出ルートを考えると、更科・埴科・小県郡地方の安曇族は、他の弥生人の進出と同様に伊那へ入り、諏訪を経て更科・埴科・小県郡地方へ進出したと考えることが合理的である。すると、安曇へ進出した安曇族も伊那から、諏訪を経て松本平へ至り、さらに安曇へ進出したと考えることが合理的である。

第2章『穂高神社史』（宮地直一、穂高神社）を読む

[穂高神社と安曇氏]

穂高神社は『延喜式』（西暦 927 年制定）に名神大社として記載されている。安曇氏が奉祭する神社であり、安曇氏によって創建されたものである。宮地直一氏は昭和 24 年に『穂高神社史』と題する書を著し、穂高神社の縁起を明らかにするために、安曇氏がいつ、何の目的で、どの様にして安曇へ進出してきたか、そしてどの様にして神社を創建したのかということについて詳しい考察を行っている。

[安曇族の東方進出]

安曇氏は、漁労を職業とするアマ（海人）を部曲（かきべ）すなわち安曇部（あずみべ）として擁した氏族であり、海人族と言われている。すでに述べたように、安曇氏族は大陸から渡来して福岡市近辺に定着していた氏族であり、いわゆる弥生人の一部である。海人族の中で安曇氏族は最も有力な勢力であったとされている。

安曇氏族が弥生人の一部として日本列島を東方へ進出して行ったことはすでに述べた。宮地氏は『延喜式』、『倭名類聚鈔』等の史料により、安曇氏族が海岸沿いに山陰地方、瀬戸内海地方、近畿地方および東海地方（美濃、三河）に分布していることを指摘している。つまり、中部地方から西方であり、それより東は殆どないのである。そうした中で、信濃国に安曇氏族が分布し定着している事実は、まったく特異な現象であり、「海人系の巨擘たる安曇族が、いかなる因縁により何を目当てとしてかような山国に遷居したか、従前学者の疑問を挟んでいとおろ、誠に不可思議の現象といはねばならぬ」と記している。この点は大場磐雄氏と同様である。

[建郡の時期と安曇族の進出時期]

宮地氏は、安曇郡は安曇氏の氏族名を以って、少なくとも奈良時代初期までに建郡されていたという。氏族名をもって建郡されたものは全国で唯一の事例であるという。安曇郡は建郡当時においては 4 郷であり、郡の大きさを五等級に分けた場合上から 4 番目の小さな郡であった。当時 1 郷は 50 戸を基準としており、安曇郡全体では 200 戸となる。そして 1 郷当たり良民は約 1400 人程であったとし、安曇郡は面積に比して郷数は少なく、人口は希薄であったことを指摘している。

そして、建郡時期は奈良時代初期としても、それよりも遙か以前の時代に、おそらく「先史時代」において、安曇族がこの地に移住してきて、勢力を拡大したと考えた。つまり建郡の時点で有力な勢力となっているためには、勢力拡大のための長い期間を必要とするからである。これは重要な指摘であり、建郡の時期と弥生文化・安曇氏族の安曇進出時期とを区分して論じる基本視点である。

[安曇氏族の安曇進出ルート]

宮地氏は大場磐雄氏の日本海ルート説を取り上げ、「その本来の職掌よりして内地に深く漁撈の利を漁るために進入し来たったのであろうという。併しそれとすれば何故に日本海沿ひの本場を見棄てたのであろう」、また「安曇族が宝玉との所縁の深い点に立脚し、これ

を越後の糸魚川下流小瀧付近に硬玉の原産地の発見せられた事実に結んで、彼等の移住の原因を説かうとする試みも提起されているが、未だ十分に洗練せられるに至っていない」とし、日本海ルートは疑問であるとしている。

つぎに東海ルートについて、大場磐雄氏は諏訪族の存在を理由にして否定したのであるが、これに対し宮地氏は一志茂樹氏の「安曇族が諏訪族に遅れて移住したとする前提において確実性を欠くので、之に先行したものと解すべく」という東海ルート説を「頗る傾聴すべきであると思う」としているが、日本海ルートと東海ルートのいずれとするかは、明言していない。

[弥生時代の遺跡]

宮地氏は安曇進出の時期を弥生時代と推測したのであるが、安曇においては「弥生式土器の発見が極めての一部に過ぎないのは、いかにも奇異の現象という外ない」という。その理由として、「それは未だ調査の行き届かないためである」としている。この点の見解はまったくそのとおりである。実際、昭和24年の頃には安曇の弥生遺跡の発掘はほとんどなされていなかった。

[松本地方の中間地点説]

そこで、宮地氏はつぎの様な中間地点説を主張するにいたった。つまり「安曇の氏人は、古墳時代の後期奈良朝に近い頃に降って（安曇において）活動を始めた」と移住時期を訂正し、「それまでは寧ろ接続する松本市の方面に主力をおいていたのであろうとの推考に導かれざるを得ない」としている。松本市方面と言うのは松本市西部の、城山南麓の辺の犬甘嶋付近のことであり、ここを中間地点として勢力を蓄え、その後建郡の時期に安曇へ進出したというのである。この主張は残念ながら勇み足といわざるを得ないのである。

[犬飼島の犬飼氏は大伴氏系]

犬甘嶋に関しては、多くの郷土史家によっていろいろと論じられている。それらによると、犬甘嶋には二つあるようである。一つは松本市島内の犬飼島であり、もう一つは松本市本郷村・岡田村付近の辛犬郷である。犬飼島の犬飼氏は穂高神社の若宮の造営奉仕をしていたために、安曇氏族の一支族である安曇犬飼氏と見做されていた。しかし一志茂樹氏の考証によると、犬飼島の犬飼氏は大伴氏であり、安曇氏とは何等かかわりのない氏である。また本郷村・岡田村付近には高句麗系の積石塚古墳群があり、この辛犬郷（辛犬養氏）は高句麗系渡来人の地といわれている。そうすると松本付近に、安曇氏族の居住した根拠はなくなってしまうのである。

[安曇進出の事情]

宮地氏は、安曇氏の進出に際して安曇には安曇氏を受け入れる素地ができていたと推測している。つまり「安曇族に固有の運航・漁撈の一方面に限ることなく、安曇野は寧ろ第二次の職業関係において満たされて永く止住するところとなった」と推測している。当時の安曇野には「在来の採取経済の域に止まった多数の住民」がおり、かれらの「原始共同体をそのままの形態を以って包容して地縁的に展び、土地と労力とをその許に集中」して

いったと考えた。そして「優れた文化と之に伴う実力との保持たる従来の部族」である安曇氏が、安曇野に居住している「低級なる先住民を配下に収めて部曲の民」としたという。

[先住民は水稻栽培文化をもっていたか]

安曇野に縄文人が居住しており、採取経済による生活を行っていたことは明らかなことである。宮地氏が指摘する「低級なる先住民」とはこの縄文人のことなのか、あるいは弥生人のことか、これについて明確に表現していないけれど、文面からは縄文人のことを意味していると思われる。

先住民が縄文人であるとすれば、彼等に水稻栽培文化を浸透させるために大変な努力と長い期間が必要であったと考えられる。当時の安曇は未開の荒野であったとのことであり、水田適地を探すだけでも大変なことであったと考えられる。宮地氏が言うように、安曇氏は古墳時代の後期、奈良朝に近い頃に安曇へ進出したとすれば、建郡と同時期になってしまうのであり、大いに疑問である。また先住民が弥生人であるとするならば、彼等はいつ、どこから安曇へ進出して来たのかが問われなければならない。

こうして見てくると、宮地氏の松本地方中間地点説にはなかなか賛同できないのである。

宮地氏は本著において、穂高神社の縁起、三郷村楡の住吉神社、更科・埴科の安曇族等についても語っているが、本稿においては紙面の都合により割愛する。

第3章「安曇氏の信濃国安曇郡への定着について」（小穴芳実）を読む

[安曇氏定着年代の問題]

小穴芳実氏は『信濃』第35巻第7号（昭和58年）に「安曇氏の信濃国安曇郡への定着について」と題する論考を発表している。小穴氏はまず、大場磐雄氏の説を考察し、大町市海ノ口の諏訪神社の銅戈について「この銅戈はもともとここにあったものでなく、新潟県の頸城地方からもたらされて祭ったようである」と指摘している。また宮地直一氏の説に関して「一志茂樹博士の研究によると（松本市島内地区の犬飼島の）犬飼氏は大伴氏であり、地名は別として阿曇犬飼とは何等かかわりのない氏である」と指摘している。そして「安曇氏の定着年代を弥生時代に推定することには無理があるように思われる」と結論している。

[安曇氏の移動と分布]

小穴氏は、海人族である安曇氏は北九州の海岸地域に発生し、その後東方へ進出していったと考え、「神武の東征を導いたのは安曇氏ではないかとの説をなす人もいる」と紹介している。そして、彼らは東海道筋や東山道筋に広く分布していたと指摘している。信濃国においては更科郡と埴科郡および安曇郡の分布を指摘している。

さらに、安曇氏は「河内王朝を支えた有力氏族の一人」であり、「河内、摂津周辺で栄えたのは五世紀頃のことであり、東国への発展はそれ以後であることが想像される」としている。つまり、大和朝廷の中で勢力を得て、それをてこにして東国（信濃国）へ進出したとしている。

これは、大場、宮路両氏の弥生時代進出説と対立する見解である。安曇誕生の系譜を探る上で、基本的な視点であり、重要な争点である。

[安曇氏の進出と先住弥生人]

小穴氏は穂高町地域の八原郷に関して次のような考察を行っている。

①「八原郷の本郷矢原には弥生時代古墳時代から奈良時代にかけての遺跡・遺物はまだ発見されていない。発見されているのは縄文時代の遺物および平安時代の遺跡・遺物である」

②「矢原の西隣烏川扇状地の扇端部分の塚原に古墳が10基ほど存在しており、付近から弥生式土器、扇央の柏原から古墳時代の土師器が出土しており、この地域が開発の核となってやがて古墳が築造されるというように発展したようにも考えられる。」

③「穂高本郷地籍は古墳時代から平安時代の遺物が比較的多く出土する地域であるが、（中略）、古くから開発された地籍であることが想像される。安曇氏の開拓がはじまったのは、この地域であることは、その奉斎する穂高神社の存在からも想像にあまりある」

④「扇端に近い等々力の字巾には弥生式土器が出土しており、扇端部分の低湿地を利用して水田耕作が比較的早くから行われていたものと思われる」

これらの考察は、②の塚原地区および④の等々力の字巾では弥生時代から水田耕作が行われていたとしているが、①矢原地区および③の本郷地区においては弥生時代には開発さ

れていなかったとしている。

しかし、これには同意できない。①の矢原地域には三枚橋遺跡や馬場街道遺跡があり、弥生時代の住居址や遺物が多数発掘されている。③の本郷地区には宮脇遺跡、穂高神社境内遺跡があり、弥生時代の遺物が出土している。前述の考察にはこれらの弥生時代遺跡に関する認識が欠けているのである。

小穴氏は、塚原地区においては、安曇氏の進出以前にすでに先住の弥生人たちが水稲栽培文化を築きつつあったという。そしてさらに旧三郷村楡の住吉神社に関連して、安曇平の弥生人の存在を認めている。すると、安曇の弥生人はいつ、どこから、どうやって安曇へやってきたのかを明らかにし、さらに安曇氏との関係を明らかにすることが、最重要課題である。しかるに、小穴氏はこれらの考察をまったく行わずに宮地氏の説を否定してしまっている。

[安曇氏の安曇への移住時期]

小穴氏は結論として、安曇氏の定着年代は「古墳・出土品の状況からして七世紀以前六世紀後半を遡るものでないことが想定される」としている。そして大和朝廷の東国への進出の一環であり、東山道を通して、農耕を主とした開発を目的にして進出してきた。当時は越後の蝦夷を征圧し開拓するための「征夷線の前進基地、兵站基地としての役割は北信濃だけでなく、中信の安曇郡においても同じ役割を負わされていたものとする」としている。そして当時、伊那谷→松本→安曇→糸魚川という交通路があったという。

この見解には幾つかの疑問がある。

- 1) この頃、大町市地域の村上郷のあった地域には弥生時代末期から弥生人と渡来系人の大きな集落ができていたのである。すると、糸魚川へ向かう「征夷線の前進基地、兵站基地」を設置するとすれば、当然に村上郷に設置すると考えるのが素直な考えである。なぜ八原郷に設置したのか？
- 2) 天皇の命によって派遣されてきた安曇氏が、氏族名を以って建郡できるのか？そして、短期間に安曇全体に勢力を張ることができたのか？
- 3) 日本書紀によれば 401 年に住吉仲皇子のクーデターがあり、安曇連濱子はこれに加担し、結果敗れて「黥すべし」と罰せられている。そしてその後、推古天皇（593～629 年）の頃までは大和政権の表舞台には現れず、日陰の存在であったのである。大和政権の東国進出の主役にはなり得なかったと考えられる。
- 4) 中央から派遣されてきた安曇氏は安曇という辺境にきて、そこに直ちに自分達の古墳を造るか？
- 5) 古墳築造年代が「七世紀以前六世紀後半を遡るものではない」ことは理解できるのであるが、しかし古墳築造者は 6 世紀よりももっと古い時代つまり弥生時代から定着し、その地に根をおろしていたことが基本条件であると思う。そして勢力を拡大し、古墳築造能力を蓄えたと考えるべきではないか。

第4章「信濃の安曇」(笹川尚紀)を読む

[阿曇氏の部曲の設立]

笹川尚紀氏は『信濃』第55巻7号(平成15年)に「信濃の安曇」と題する論考を発表している。笹川氏は、大場磐雄氏の説について、「(大場氏は安曇族の移住の)時期は弥生時代にまで遡及すると説く。興味深い見解ではあるが、阿曇氏の部曲(カキ)である安曇部は、後に安曇郡となる地域の住民の一部を割き取って設定されたと捉えるべきで、安曇族の移住が実際に行われたとは想像し難い」と言う。

[海人の宰]

安曇氏に関しては次のような事が知られている。日本書紀によれば、阿曇氏は応神天皇から「海人の宰」に任命されたとある。そして阿曇氏は海の漁労によって生活していた人々、海人(アマ)を支配下に収め、阿曇部として組織していたと考えられている。中国の史書によると、当時の倭人の海人達の漁撈は素もぐりによって魚や貝を獲るものであった。阿曇氏は天皇の支配下におり、そのような海人たちの統率者であり、同時に天皇の食膳に与る内膳司の長官・奉膳に就任した氏族であった。

[阿曇氏と屯倉の関係]

笹川氏は、記紀およびその他の史料から「阿曇氏は海人を統括し大王の食膳に与るという職掌に基づき、屯倉管理に積極的に関与するに及んだことは疑いあるまい」としている。そして、黛弘道氏の説に基づいて「(松本市の北部一帯にあった)辛犬郷付近に屯倉が所在した」と考えた。

推古天皇(593~623年)の頃、「蘇我氏は筑摩郡にソガ部を設定しその勢力を扶植、それに呼応して同郡の北部地域周辺に屯倉が設置された」。その後、「蘇我氏と密接な繋がりを有し、且つ屯倉経営に積極的に関与していた阿曇氏が、その管理者として派遣された」と言う。

しかし一志茂樹氏の研究によって、辛犬郷の犬飼氏は安曇氏とは何等関係ないということが判明しているのである。笹川氏はこの点についてどのように考えているのだろうか？

またこの頃松本周辺には強大な勢力ができており、それを差し置いて大和から安曇族を派遣することが出来たのか？さらに、安曇族が安曇を自分の支配下におさめてしまうのを、松本の勢力は黙って見ていたのだろうか、大いに疑問である。

[安曇郡への進出]

笹川氏は「信濃の阿曇部は海人的性質を一切有さなかったと目されるのであり、その設置時期は畿外地域に屯倉が盛んに設けられるに至った6世紀中葉以降に必然的に求めなければならなくなる」としている。

笹川氏の説は、安曇平には多数の弥生人先住民がいたことが前提である。しかしその弥生人先住民に関する考察が一切ないことが、その根本的問題点である。

第 5 章「安曇氏入信に係る考古学的証明」、「信濃の海人族」、「古代安曇郡に観る漁撈民の問題」（桐原健）を読む

[安曇郡の建郡]

桐原健氏は『東アジアの古代文化』（58号、平成元年）に「安曇氏入信に係る考古学的証明」と題する論考を發表している。桐原氏は建郡の時期について、「とも角も建郡は古墳時代に起こった事件である」とし、「安曇氏によって建郡された時期の上限は大和政権が東国に勢力を波及させてきた五世紀代においてよい」としている。ただし、その根拠は何も示していないので不明である。

[海人族の特徴としての二次葬、抜歯]

桐原氏は、安曇氏は海人族であるからその特徴である言葉が特殊、黥面（顔および身体の入墨のこと）、抜歯、洗骨の埋葬儀礼、頭上運搬、若者宿、泣女という特徴があると言う。そしてこれらの特徴のうち洗骨葬（二次葬）は考古学的に立証できると主張する。これは桐原氏の第一の基本命題である。なお、人骨があれば抜歯によっても立証できるはずである。

また、桐原氏は「信濃の海人族」と題する論考を『信濃』（第58巻1号、平成18年）に發表している。そこで千曲川・犀川水系の4つの遺跡について考察し、また九州地方の海人族の葬法も比較した上で、「以上の考古学的所見は崖葬の分布と海民の分布との重なりを期待する短絡的思考の不可なことを覚らせた」としている。この文章は二次葬（崖葬も含まれる）と海人族とは関係ないという意味である。とすると、海人族＝二次葬という基本命題は成り立たないことになり、桐原氏の主張は自己矛盾していることになる。

[二次葬、抜歯は海人族固有の習俗か？]

一方、桐原氏の別の著書、『日本の古代遺跡・長野』（桐原健、樋口昇一、保育社、平成8年）によると、信濃国の全般にわたり、海人族と無関係の縄文・弥生時代の数多くの遺跡から、再葬墓が発見され、火葬骨も発見されており、また抜歯された頭骨が多数発見されているとのことである。小諸市大久保の氷遺跡は海人族とは無関係の縄文人の遺跡であるが、ここからは黥面土偶が出土しているとのことである。これらの事実から、海人族だけが二次葬（再葬）・抜歯・黥面を行っていたのではないことがわかる。

[魏礪城窟は火葬場か？]

また、桐原氏は、旧有明村の魏礪城窟内が「床面に火熱の痕が顕著」であったことから、「灰層・焼土が厚く堆積していて葬所は骨肉分離の場でもあることが思われ、海民の葬送習俗を連想させた」と述べている。

しかし、魏礪城窟は後世に修験の場として使われていたとのことであり、その時の焚き火の跡かもしれない。火熱の痕があったからと言って、すぐに火葬場だったと言うのはあまりに早計であると思う。

[安曇に漁撈民はいたのか？]

桐原氏は「古代安曇郡に観る漁撈民の問題」と題する論考を『信濃』（第46巻第10号、

平成6年)に発表している。

『延喜式』に信濃国から「楚割鮭」「鮭子」が貢納されたとの記録がある。また、平城宮の南北溝から出土した木簡に「□□国安曇郡□□年魚二斗七升」と記載されていた。「倭名抄」によると「年魚」とは鮎のこととある。これらのことから桐原氏は「安曇郡には縄文の太古から漁撈民の歴史があった」と言う。そしてさらに「安曇野の東辺、犀川に臨んだ一帯に漁撈民の存在が指摘できる」と主張する。これは桐原氏の第二の基本命題である。

しかし、奈良文化財研究所史料室によると、平城宮出土の木簡に書かれている安曇郡の「曇」文字は、肉眼では読み取り難かった。そこで、赤外線調査を行ったところ、「曇」ではなく「芸」であることが判明したとのことである。従来解釈は間違っていたのである。すると{安曇郡の年魚}ではなく「安芸郡の年魚」となる。また、『延喜式』は平安時代(927年)のものであり、記述内容は信濃国のことであって、安曇郡のことではない。つまり、これらのことは安曇郡に漁撈民がいたことの根拠にはならないのである。

また、安曇の鮭漁に関して、近世において鮭役制度があったとか、江戸時代に鮭漁を藩主にみせたとか、昭和初期には鮭が店頭で並んでいたとの記録があると言う。さらに明治の頃まで信濃川から千曲川、犀川を遡上し、奈良井川まで遡上してきていたとのことであり、当然高瀬川の方へも遡上して行ったと考えられると言う。

しかしこの様な事実によって、それより約2000年も昔の縄文・弥生時代の安曇において、鮭漁の漁撈民がいたと主張することは全く乱暴な論法であり、納得できないことである。

[安曇の遺跡から鮭鱒漁関連遺物は出土していない]

前掲の『日本の古代遺跡・長野』によると、長野市若穂町の宮崎遺跡は縄文時代の遺跡である。ここで鮭捕獲用と考えられる鹿角で作られた銚先や鮭の推骨でできた耳飾りが発見されている。南佐久郡北相木村の栢原岩陰遺跡は縄文時代の遺跡である。ここでは鮭や鱒の脊椎骨が発見されており、骨針・骨篋・釣針などの骨角器が多数あった。

一方安曇郡においては、明科町の犀川流域に北村遺跡がる。ここは縄文時代および奈良・平安時代の遺跡であり、縄文時代の人骨300体をはじめ多数の出土品がある。しかし、ここでは鮭鱒漁に関連する遺物は何も発見されていない。また当時の食生活においては植物性食品が大半であったとのことであり、鮭鱒を多量に食していたとは考えられない。次に、明科町のほうろく屋敷遺跡は犀川流域の縄文・弥生・平安時代の遺跡である。住居址や再葬墓、遺物が多数発掘されている。しかし北村遺跡と同様に、鮭鱒漁に関連するものは何も出土していない。さらに豊科町の町田遺跡は犀川の右岸にあり、弥生時代の遺跡である。多数の住居址や遺物が発掘されているが、前述と同様に、鮭鱒漁に関連するものは何も出土していない。

こうしてみると、安曇郡の古代において、鮭鱒漁は行われていなかったと考える方が素直と言えるのである。

[安曇氏と安曇の海民の結合]

桐原氏はつぎに安曇県（「アガタ」）が分解し、その時に安曇の漁撈民と安曇氏が結びついたと主張する。これは桐原氏の第三の基本命題である。この点に関する論理は難解であり、話の筋が分かり難い。おおよその推察を加えて解釈すると次のようになる。

まず、安曇平には縄文時代から漁撈民が居住していた。信濃国は古くは科野国と言われ、また安曇郡は安曇県と言われていた。そして県主の下に支配されていた。

一方安曇氏は「欽明朝に蘇我氏と結ぶことにより中央での活動を回復し、蘇我氏ともどもに東国進出を開始する。信濃にあつては国造の命に服さぬ海民の動きをとらえ、科野国造の地盤を浸蝕していく。安曇の海民との繋がりが得られたのは六世紀後半のこと」（前掲の「信濃の海神族」（桐原健）より）であると言う。

つまり丁度そのころ、安曇県の県主の勢力が低下し、安曇県が分解した。この時、安曇の漁撈民は中央の安曇氏の部曲（かきべ）すなわち安曇部に変わった。そして安曇郡を興したというのである。

ここにも幾つかの疑問点がある。

1) 安曇氏と安曇の海民との繋がりが得られたのは6世紀後半のこととすると、安曇建郡の時期は6世紀後半以降ということになる。しかし、安曇郡の前身の安曇県は4世紀末から5世紀はじめ頃には出来ていたのである（詳細は後述）。つまり安曇県の成立時点が安曇氏進出よりも早くなってしまい、矛盾するのである。

2) 桐原氏は、本稿のはじめに示したように、安曇郡成立は5世紀代としてよいとしているのである。すると安曇氏進出が6世紀後半ということと全く矛盾している。

3) 安曇県成立時点で安曇に居住していた住民がどういう人々なのかについて全く考察していない。かれらが弥生人だとすると、いつ、どこから、どの様にして安曇へ進出してきたのが重要であるのに、その考察が欠落しているのである。

4) 安曇氏は蘇我氏ひいては天皇の命で安曇へ進出してきたと主張するが、そのような地域を自分の氏族名をつけて建郡することができたのだろうか？ そのような行為は天皇の支配地を掠奪するようなものであり、あり得ないことである。

5) 海人と呼ばれる人々は、素もぐりによって魚や貝をとっていたのであり、その漁法は犀川・高瀬川・穂高川に適用できるようなものではない。仮に安曇に漁撈民がいたとしても、安曇氏（海人族）とは無関係と考えられ、なぜ結びついたのであるのか疑問である。

第6章『信濃安曇族の謎を追う』（坂本博）を読む

坂本博氏は郷土史家という立場ではないが、安曇族について独自に研究調査し、『信濃安曇族の謎を追う』（坂本博、近代文芸社、2004）を著している。安曇族の安曇への移動に焦点をあてて、ユニークな発想に基づいて書いている。安曇族の安曇移住の要点について見てみる。

1. 坂本氏は、安曇郡の設置が645年頃と考えた上で、安曇族はそれを遡ること約100年位以前に安曇に進出して定着したと言う。つまり安曇族の移住時期は6世紀半(550年ころ)であると言う。

しかし、安曇郡(安曇県)設立は645年頃ではなく4世紀末から5世紀はじめ頃と考えるのが妥当である(詳細は後述)。これは坂本氏の主張する安曇郡設立時代と大きなズレがあり、大いに疑問である。

2. 安曇への進出ルートは北からのルート、すなわち糸魚川から姫川を遡上してくるルートであるとしている。これは伊那から諏訪を経由してくるルートは、諏訪族が勢力を張っており、そこを通過することはできなかったと考えるからである。しかしこれは、進出の時期が6世紀半と考えるからであり、もっと古くに進出したとすれば問題ではない。

また、糸魚川からのルートに関しては、当時大町地域には大きな集落が形成されていたのであり、そこをどうやって通過することができたのか? 諏訪地域を通過することはできないが、大町地域を通過することはできたというのは不合理である。

3. なぜ安曇へやってきたかという問題について、非常にユニークな着想を提示している。それは、527~528年に北九州で筑紫国造磐井の反乱が起こっており、その反乱に安曇族も加わっていた。そして反乱が鎮圧された後、大和朝廷側からの報復を恐れて、磐井葛子は安曇族とともに逃亡したという安曇族逃亡説である。彼等は一族ともども家財道具等すべてを船に積み、日本海を東へ向かって逃走したという。そして糸魚川へたどり着き、そこで船を捨て陸に上がり、そして安曇へ向かったと言うのである。

その一つの根拠として、穂高町の上原古墳から出土した直刀は砂鉄から作られており、それは筑前で作られたものであるという。しかし、日本で砂鉄精錬が始まったのは吉備地方において6世紀後半からとされている。(『大系日本の歴史②古墳の時代』和田 萃、小学館、2000.5)とすると磐井の乱とは時代が矛盾するのである。

糸魚川を選んだ根拠は、以前から糸魚川の蝦夷とは交易上の交流があり、歓迎されたというのである。この辺の事情は誰にも分からないし、何とも言いようがない。しかし、海上交易・交通を生業とする安曇族がなぜ糸魚川で船を捨て陸に上がったのかということについて、いろいろ記述しているがまったく説得力に欠ける内容である。

安曇を選んだ理由として、安曇は「不毛の荒地であって、先住民が居なかったか、あるいは大変少なかった」から、無理なく進出できたと言う。しかし前述したように、この頃にはすでに安曇県が成立していたのである。坂本氏の主張には同意し難い。

坂本氏によると安曇族は北九州から大和朝廷の報復を恐れて逃亡してきたのである。に

も拘わらず、安曇族は糸魚川から大町地域そして安曇地域というように大和朝廷に近づいてきたのである。本来遠ざかるべき敵にわざわざ近づいているのである。なぜなのだろうか？このように、安曇族逃亡説は大いに疑問である。

4. 坂本氏は安曇族には2系統あるというユニークな説を提示している。一つは北九州糟屋郡地域に定住していて磐井の乱に加担した系統で「筑前のアズミ族」＝安曇族であり、もう一つは畿内地域に勢力をもっていた系統で「畿内のアンド族」＝安曇族であると言う。この主張には根拠が示されておらず、何とも論じようがない。

安曇族が北九州地方を拠点としており、東方へ進出して、中部地方以西に全般的に分布していることはすでに明らかなことである。「筑前アズミ族」と「畿内アンド族」の説は全く理解し難いものである。

5. 坂本氏はエゴとオキユートに関する食用分布を独自に調査し、「筑前アズミ族」の分布とエゴの食用分布とが一致するとしている。その調査結果から、烏川を境にして北側までがエゴを食べる範囲であるとしている。従って「筑前アズミ族」は烏川の北岸までやってきて、そこで定着したと主張するのである。面白い着想と思うが、1500年も昔の食用分布と現在の食用分布が一致するのだろうか？到底納得できる説ではない。

6. 坂本氏は古代から穂高地域では鮭漁が盛んに行われ、収穫された鮭は「楚割鮭」に加工して都へ運んでいたとしている。その根拠として「穂高町の郷土資料館にはかつて万水川などでサケを捕るのに使った大小のヤスや投げ網が展示されている」とし、その説明版の解説を記載している。

しかし、安曇の弥生時代・古墳時代において鮭漁が行われていたとする根拠はなにもないのである。

坂本氏はさらに安曇族の滅亡過程について語っているが、なかなか理解し難い内容でもあり、ここでは割愛する。

第2編 弥生時代のはじまりと安曇郡・信濃国設立時期

第1章 水稲栽培のはじまりと弥生人の進出

[稲作の起源]

稲は日本にはなかった植物である。それがいつどのようにして日本に入ってきたのかということについて、『日本人 はるかな旅4イネ、知られざる1万年の旅』（NHKスペシャル「日本人」プロジェクト、日本放送協会）が分かりやすくかつ詳しく書いている。これに基づいて稲（水稲）の日本への到来の事情を見ることにする。

稲作の起源地は中国大陸の長江の中流域であり、1万2千年前頃とされている。その後、浙江省の河姆渡遺跡（かぼと）で7千年前の大量のイネが発見された。さらに江蘇省の草鞋山遺跡（そうあいざん）で世界最古の6千年前の水田の跡が発掘された。そして5500年前頃、米粒はそれまでのものに比して飛躍的に大きくなっており、この頃に水田栽培技術が大きく進化したと考えられている。

[日本での稲作のはじまり]

日本列島においては、岡山県朝寝鼻貝塚において国内最古の6千年前の米が確認された。この発見は「プラントオパール」という米に固有のガラス質の化石を分析確認する方法によってなされた。その後、島根県や鹿児島県で縄文時代の稲作の痕跡が見つかっている。これらは、河姆渡の人々など中国大陸の潜水漁労民が日本列島に渡来して、潜水漁やイネ作りをはじめたことによると考えられる。

[水田栽培のはじまり]

佐賀県の菜畑遺跡から2,600年前の日本最古の水田跡が発見された。その頃、縄文人たちは盛んに朝鮮半島へ出かけて行っていたので、その際水田稲作技術を持ち帰ったと考えられる。そしてこの頃から徐々に水田稲作に転換していったと考えられている。

[イネのDNAと種類]

イネのDNAを分析調査したところ、河姆渡遺跡の米は熱帯ジャポニカという種類のものであり、菜畑遺跡から出土した炭化米と一致することが判明した。また現在対馬で栽培されている赤米も熱帯ジャポニカである。これはラオスでは焼畑によって栽培されている。これに対し、2300年前頃に中国大陸や朝鮮半島から渡来人が移住してきて、新たな水稲栽培技術をもたらした。このイネの種類はDNA分析により、温帯ジャポニカという別の品種であることが分かった。

現代の米は品種改良されているが、そのほとんどが温帯ジャポニカである。コシヒカリはその代表的例である。

[水稲栽培の日本列島全体への伝播]

弥生時代はじめ、北九州地方へ渡来してきた弥生人たちは日本列島を東方へ進出していた。それにつれて当然、水稲栽培文化も広がっていった。水稲栽培において、縄文のイ

ネである「熱帯ジャポニカ」と弥生のイネである「温帯ジャポニカ」を混植することによって、寒冷地にも適したイネができ、そのことによって、水稻栽培は急速に日本列島を東へ伝播していった。弥生時代の中頃、西暦元年（0年）頃には、青森県まで伝播していたのである。

[渡来系弥生人と縄文人]

今から2300年前頃（紀元前300年頃）から弥生時代が始まる。その頃中国大陸や朝鮮半島から北九州近辺へ渡来した人々がいる。この人たちは頭骨調査により、縄文人とは異なる種族であり、中国大陸からの渡来人であることが分かった。彼らは弥生人と呼ばれている。福岡の板付遺跡は縄文集落とは異なる新たなタイプの集落、つまりこれらの人々による弥生集落である。

弥生時代における渡来は、多く見積もっても1年に数十人程度の規模であり、二家族とか三家族とかの少数の人々が、長い期間にわたりばらばらとやってきたと考えられる。

[血液HLAの型による渡来ルートの推定]

人間の血液には「ヒト白血球抗原」、略称HLAというものがあり、この型を調査することによって、日本人の成り立ちが分かる。その調査によると、日本人に最も多い約3割を占めるHLAの型は韓国人・中国北部の漢族・モンゴル人などと共通していることが分かった。このことから、中国北部から渡来してきた人々が最も多かったと推定できるのである。次に多いHLA型は日本海沿岸の日本人に多く、韓国人にも多いことが分かった。これから、朝鮮半島から日本列島の日本海側へ渡来してきた人々が二番目に多かったと推定できる。この他に中国の長江流域から九州地方への渡来ルートと中国南部から南西諸島を通過して太平洋側への渡来ルートがあるとのことである。

[弥生人の移動と戦争のはじまり]

弥生人が東へ移動を始めるのは弥生時代はじめ、2300年前のことである。そのスピードは大変速く、ほぼ時間差なく中国・近畿、そして名古屋周辺の濃尾平野に達した。

弥生人たちは水稻栽培を基盤にして、人口を爆発的に増加させていった。同時に、人口増加に伴い、土地争いや水争いが頻発するようになり、それが集落同士、地域同士の本格的な戦争へと発展していった。戦いは狩猟採集文化の縄文時代にはなかったが、農耕文化の弥生時代に入ってから戦いが始まったのである。戦いによって殺されたと考えられる骨が多数発掘されている。そしてこの頃、人を殺すための武器が作られるようになる。

弥生人同士の争いの他に、弥生人は移動先において縄文人と戦い、彼らを駆逐することによって進出していったと考えられる。

[弥生人の進出停止とにらみ合い]

しかしその急速な進出は、なぜかいまの名古屋周辺、濃尾平野でストップする。そこから東は縄文人の勢力の強い地域であり、弥生人にとっても進出し難かったのである。そし

て約 200 年あまりもの間、にらみ合いが続いた。

このにらみ合いの間、縄文人たちは西日本へ出かけていき、水田稲作文化を視察しにいったようである。この根拠として縄文式土器である氷式土器が兵庫県伊丹市の口酒井遺跡から発掘されており、しかも地元の土が使われていたことが上げられている。縄文人の水稲栽培に対する強い欲求の現われと言える。

[弥生人の進出の再開]

そして約 2100 年前、弥生時代中期のはじめ、濃尾平野で足踏みしていた弥生人たちは、突然、再び東へと進出を開始する。関東平野に進出し、また天竜川を遡り伊那谷を經由して信濃、上野・下野、武蔵へも進出していった。この進出の一環として、松本平地域・佐久平地域・善光寺平地域へ弥生人が定着し、勢力を拡大していったのである。

この進出は戦いによるのではなく、縄文人との融合によって進められた。例えば、小田原市の中里遺跡は大規模な水稲栽培集落であるが、出土遺物のなかで弥生式土器は少なく縄文式土器が大半である。また鏃や武器など戦いの根拠はほとんどない。つまり少数の弥生人がやってきたのを聞きつけて、地元の縄文人がわっと集まり、弥生人と協力して集落を築いていったのである。この現象は他でも同様と考えられる。

[日本人の誕生]

弥生時代において、弥生人と縄文人の共同生活の中で混血が進み、その結果日本人が誕生したのである。弥生人と縄文人の混じりあいの度合いは地域によって異なっていた。北部九州地域では弥生人の影響が強く、東へ行くに従って弱くなり縄文人の影響が強くなるのである。日本全体で見ると、西から東へかけて多様な人々が誕生した。そしてそれらの多様な人々が日本人なのである。

弥生時代の中期以降においては争いのない時代であった。しかし、その後弥生時代後期、卑弥呼の死後「倭国大乱」という争いが発生するのである。

(2958 文字)

第2章 信濃国成立、安曇郡設立の時期についての考察

[信濃国成立の時期]

信濃国の成立時期はこれまでおおよその時期として、六世紀（501～600年）頃と言われてきた。しかし、最近の情報ではさらに一世紀繰り上げて、五世紀とする説が有力となっている。

1) 日本書紀の雄略紀11年（468年）の記述に、「信濃国と武蔵国の直丁（つかえのよほろ）」が天皇を批判し鳥養部にされたとある。この記述より、この時にはすでに信濃国は成立していたことが分かる。

2) 中国の史書『宋書』によると、421年に倭国王、讃が宋へ朝貢した。その後も倭国王の朝貢が続き、478年に倭王、武が朝貢している。この『宋書』の記述により、この頃、421～478年の間に大和政権は日本をほぼ統一していたと考えられる。そして科野国も出来たと推測できる。

3) 更埴市森には森將軍塚古墳と言われる大きな前方後円墳があり、築造は4世紀後半（300年代後半）とされている。従ってこの頃、この地域に強大な勢力が成立していたことが分かる。この古墳の出土品のなかに三角縁神獣鏡の破片がある。三角縁神獣鏡は大和政権が各地の首長の地位の承認のしるしとして与えたものである、とする有力な小林行雄氏説がある。この説に従うと4世紀後半においてこの地域が大和政権の支配下に入っていたことになる。松本市中山丘陵には弘法山古墳がある。これは4世紀初頭に築造された大きな前方後方墳であり、この地域に強大な勢力が成立していたことが分かる。しかし前方後円墳ではないこと、三角縁神獣鏡は出土していないことから、4世紀初頭（300年代はじめ）においてはまだ大和政権の支配はこの地に及んでいなかったと考えられる。

4. 埼玉県に稲荷山古墳がある。『日本の歴史2古墳に時代』（和田萃、小学館、2000年）によると、そこから出土した鉄剣に次の様なことが刻まれている。鉄剣は471年7月に製作された。持ち主はワケ臣であり、8代前の先祖の代から大王の宮に仕えており、今はワカタケル大王（雄略天皇）の宮に出仕している。この記述の8代前を約80年位前と仮定すると、400年代はじめとなる。するとこの頃には、大和政権はほぼ成立していて、武蔵国（埼玉県地方）・上野国・下野国の有力者がその支配下に入っていたことが推測できる。そして武蔵国から都へ行く際は、碓氷峠を越えて信濃国を経由する東山道を通ったと考えられる。すると当然のこととして、この頃、400年代はじめには信濃地域は大和政権に服していて、信濃国（科野国）は成立していたと考えられる。

5. 熊本県の阿蘇神社の社家に『阿蘇系図』なるものが所蔵されている。『池田町誌』（池田町誌編纂委員会、平成4年）はこの中の科野国造に関する記述をもとにして、「科野国の範囲などが固まって、国造の任命のあった時期については、五世紀初頃（西暦420年前後）であろうといわれている」としている。なお、信濃国は、はじめ「科野国」と表記されていたが、713年に「信濃国」へ変えられたという。また科野国以前には「科野国」と「州羽国」が存在していたという。

この様な歴史史料から判断すると、信濃国（科野国）の成立時期は5世紀はじめ頃（400年代はじめ）と考えることが妥当である。

[安曇郡の成立時期]

『池田町誌』によると、「科野国や州羽国が成立する以前に地域別に『県』が成立し始める」。そして「『県』（あがた）は大化改新（645）までの政治体制で改新以後は『評』（こおり）と改まり、大宝律令（702）によって『郡』（こおり）に改められたところから、県の大きさは、後の各郡の範囲とおおよそ一致する」としている。

『大同類聚方百卷』という史料があり、これに「信濃国安曇郡県首（あがたのおびと）」家に家伝の「透立薬」があることが記されている。『池田町誌』はこれに着目し、「注目すべきは県首である。この県は五～六世紀初に存在した国県制の時代に、国には国造を、県には県主または稲置が大和政権から任命されたと言われている。（中略）。その地方長官であった県主（稲置）も評督（こおりのみやつこ）→郡領（こおりのみやつこ）→大領（おおみやつこ）へと、その職名も逐次改められている。その姓（かばね）も臣（おみ）・直（あたえ）・首（おびと）などが与えられているところから安曇県主の末孫はなおも祖先の古職名を踏襲していたもので、恐らくその氏は安曇県を開いた安曇氏であろう。」と言う。

そして「信濃国が建国される以前から十郡の基となる県が先にあって建国後も国の下部組織として編入され、それが評へ、評から郡へと遷りかわったのではないかと思われる。『安曇郡県首』記録こそ、それを裏付けする古墳や遺跡などと共に安曇郡の建郡年代を研める重要な史料である。」としている。

このように、『池田町誌』は、安曇県は信濃国（科野国）が成立する以前、すなわち4世紀末から5世紀はじめのころに成立していたと推測している。説明を加えると、はじめ安曇に有力者がいてこの地を支配しており、それがやがて安曇県として形成され、次いで科野国の一部として編入されたと言うのである。この説は合理的な推測と言える。

[池田町誌の混乱]

一方安曇氏の安曇進出について、『池田町誌』は次の様に述べている。

「安曇氏が何時安曇郡の地に定着したかについては、『南安曇郡誌第二巻上』（昭和43年）においては、六世紀後半（西暦550～600）としているが」、近年の遺跡の発掘調査によって、「高瀬川左岸段丘上の大町市社地区においては四世紀後半の方形周溝墓や五世紀代の古墳・住居址などが続々と発見され」、安曇郡の古代史観は一変した。安曇氏は「はじめ大町市社地区の河丘段丘上に住居を占め、後穂高町有明地区に居を移し、さらに南下して穂高町付近に定着したのではないかと推定される」ようになったとしている。そして「五世紀後半の古墳の存在や、同時代に存在したと推考される『安曇県』のことなどから安曇郡の成立を概ね一世紀繰り上げた方がよいと考えられる。」つまり、安曇氏は5世紀後半に安曇へ進出し定着したというのである。しかし、この見解については疑問がある。

『池田町誌』は、はじめ『阿蘇系図』に基づく推測として科野国設立は5世紀初頭であるとし、つぎに科野国設立以前に安曇県が成立していたと言い、そして安曇氏の安曇進出

は5世紀後半であるといっている。すると、安曇県成立の時には安曇氏はいなかったということになる。それでは安曇という名称が付かないことになる。これは『池田町誌』における論理矛盾である。

また次のようにも言っている。「安曇氏が安曇郡を建てる以前に、安曇県の存在性はまだ薄い、安曇氏が後の安曇郡の地へ入植する以前に他の種族が部分的に入植し開発に着手していた場合も考えられる」。このように『池田町誌』は混乱しているようである。

なお、日本書紀によれば5世紀はじめ(401年)に住吉仲皇子の叛乱があり、安曇連濱子はこれに加担し、罰せられている。そのため安曇氏は5世紀から6世紀中頃までは大和政権の表舞台から姿を消しており、安曇へ進出できるような状況ではなかった。

[安曇郡の成立は4世紀末頃と推測]

科野国(信濃国)設立、安曇県(安曇郡)の成立時期の問題は史料の乏しい時代のことであり、あいまいにならざるを得ないが、冷静に推測すると次の様になる。

科野国(信濃国)設立は5世紀初頭であり、安曇県(安曇郡)成立は4世紀末頃であると考えることが妥当である。そして安曇氏進出は、安曇県成立以前であるが、どれ位以前かは、これらの史料でははっきりしないのである。もっと古い遺跡・遺物を調査し考察する必要がある。

第3編 安曇の弥生時代遺跡の考察

第1章 黒沢川右岸遺跡

[遺跡の概要]

黒沢川右岸遺跡は、旧三郷村小倉の黒沢川右岸にあり、近辺には縄文時代の遺跡が多数ある。昭和58年9月に発掘調査され、約30m×50mの狭い範囲であったが、約60cm厚さの表土の下からさまざまな遺物が発掘された。

その報告書によると、4つの住居址が発掘され、そのうち2つからは縄文式土器や石器が出土し、縄文式住居址と判断された。他の2つからは弥生式土器や道具類が出土し、弥生式住居址と判断された。その他に、数多くの小竪穴や土壇が発掘され、また集石（人為的に集められた石の群れ）も2箇所あった。その集石からの出土遺物には縄文土器と弥生土器がほぼ同量あった、とのことである。これから、ここでは弥生人と縄文人が共存して生活していたと推測できる。

[出土品の内容]

土器は、「弥生時代中期中葉に帰属する土器であり、明科町緑ヶ丘遺跡出土土器に類例が多い。また南信の阿島式土器や尾張・美濃の貝田町式土器の影響をうけた土器も多く見られる」とのことである。とすると、この遺跡は弥生時代中期中葉（西暦元年頃）のものである。

石器のなかに打製石包丁がある。これは稲の穂を刈り取るために使われるものとされている。そして、靱痕がついた土器片がある。これらは、この地で稲作が行われていたことを示している。

土製紡錘車および目の細かい布の圧痕がついた土器片が出土している。布は極めて均質な細い糸（原料は不明）を織って作られたものと推測され、この地の弥生人たちが高度の紡織技能をもっていたことが分かる。

報告書には、石戈（せっか）が出土したとされている。石戈は銅戈を石にうつしたものであり、実用的なものでなく、高級文化や権威の象徴を示すものであったと考えられている。これは、大場氏が安曇族と強い関係があるとして探していた石剣のことではないだろうか？ しかし残念ながら、実物は行方不明とのことである。

[遺跡と出土品の保存]

黒沢川右岸遺跡は、安曇郡の中で最も古い弥生時代遺跡とされている。弥生人が安曇へ進出してきたのは、この地であると考えてよいと思う。その点で、ここは安曇の発祥の地と言えるのである。この遺跡は安曇野にとって第一級の貴重な遺跡と言えるのであるが、

[黒沢川右岸集落の消滅]

黒沢川右岸の集落は長くは続かず、弥生時代後期には途絶えてしまう。黒沢川右岸地域は扇状地の先頂部に近く水田稲作には適していないので、水田稲作に適した地を求めて移動して行ったと推測される。

なお、黒沢川右岸遺跡の近くに堂原遺跡があり、ここにも弥生時代中期の生活の痕跡が

あるとのことである。

第2章 滝の台遺跡

北安曇郡池田町は安曇郡の前科郷があった地である。この遺跡は池田町大字会染滝沢にある。遺跡は出土品から見て、弥生時代後期の最終末の頃であり、おそらく年代としては4世紀に入っていると考えられる。

遺構としては、13軒の弥生時代の住居址と中世の墓とみられる1基の土坑があった。住居址は堀立柱式の竪穴住居址である。

土器は弥生式後期のものが膨大な量出土したが、復元可能なものはわずかであり、多くのものは磨滅（河川の氾濫によると思われる）していた。

石器としては石包丁、磨製石斧、砥石など数点がある。なお、縄文期のもものとよく似た打製石斧と砥石が数点出土したことは注目されることである。

鉄器として2口の槍鉋と斧があり、小型であるが完成品である。この他に鉄製品の破片がいくつかある。

住居址の壁がかなり損傷を受けていることや土器等の遺物の出土状況が散乱し攪乱した様子であること、また土層の状況から、何回も大きな河川の氾濫に見舞われたことが判断される。

第3章 穂高町の弥生時代遺跡

穂高町は安曇郡八原郷があったところであり、100基近い古墳がある。しかしこれに対応する集落跡・遺跡遺物の発掘は少ない。穂高町地域は烏川の度重なる洪水被害を受けているため、地下に埋まってしまったり、後世に開発されてしまったりしたと推測される。矢原・白金・等々力集落地域は、地味豊沃であり湧水を得やすいために原始的な農業集落に適した地帯であるとされており、この地域では弥生時代遺跡がいくつも発掘されている。

- ・ 等々力巾上巾下遺跡 等々力地区

地下2mのところから弥生時代後期の土器が出土した。

- ・ 三枚橋遺跡 矢原地区

弥生時代中期・後期の住居址、土器、土製紡錘車等が出土した。

- ・ 馬場街道遺跡 矢原地区

矢原地区周辺では数多くの縄文式土器・石器、弥生式土器、土師器、須恵器等が発見されている。昭和60年の調査では、弥生時代の土壌、土器が出土しており、近くに集落があったと推測できる。

- ・ 宮脇遺跡 本郷地区

弥生時代中期の土器が出土した。

- ・ 穂高神社境内遺跡 本郷地区

弥生時代の土器、石器が出土している。また明治時代の頃に地下約12mのところから、

古墳時代の土器が発見された。

- ・ 南原遺跡 本郷地区

弥生時代中期前半から後期にわたる土器片が多数出土し、なかでも中期中葉に帰属する在地条痕文系土器はまとまりをもって出土した。

- ・ これらの他に、塚原遺跡（柏原塚原地区）、他谷遺跡（牧他谷）、離山遺跡（牧離山）などでも弥生時代遺物が発見されている。

第4章 町田遺跡

豊科町は安曇郡の高家郷とされているが、対応する遺跡はこれまで発掘されていない。町田遺跡は豊科町田沢の犀川の東側にある。安曇平の対岸にあり、古代において安曇郡とどのような関係であったかは不明である。

遺跡から竪穴式建物10軒の他に掘立柱式建物3軒が発掘された。これは、当時の集落としてはかなり大きい規模であり、短期間にできたとなると、住民たちはどこから大挙して移住してきたと思われる。

土器・石器類はいずれも弥生時代中期後半のものである。石器として多数のスクレーパーがあり、これらは伊那谷に多く認められるもので、伊那谷との交流が考えられる。一方、土器は松本平南部の遺跡出土土器群より、より善光寺平に近い要素を認めることができることである。

遺跡は弥生時代中期後半のものであり、犀川沿いの湿地帯に水稻栽培を行っていたと考えられる。しかし集落の存続期間は短く、やがて洪水で埋没してしまったと考えられている。そして、集落が洪水で埋没したあと、住民たちはどこへ行ったのだろうか？ 全滅してしまったのだろうか？ また犀川を渡って西の安曇平へは行かなかったのだろうか？

第5章 緑ヶ丘遺跡、ほうろく屋敷遺跡

明科町は安曇郡の前科郷に入っていたのか、はっきりしない。最近では、明科地域は高家郷であったという説が出されているが、いまのところ断定し難い。明科町には弥生時代遺跡として緑ヶ丘遺跡とほうろく屋敷遺跡がある。

緑ヶ丘遺跡は七貴塩川原にある。土器は東北地方から波及してきた縄文時代晩期の土器の影響を受けたものが少しあり、東海地方や関東地方の弥生時代中期前半の土器と類似した特徴をもつものが多数出土している。また弥生時代中期末のものもある。土器には、靱痕のついたものや布目圧痕のついたものもあり、水稻栽培や紡織が行われていたことが分かる。石器では稲や雑穀類の穂積具である石包丁や半月形石器等がある。さらに集石遺構が検出され、そこから各種石器や土器が多量に出土し、また獣骨や石鏃も出土している。

ほうろく屋敷遺跡は南陸郷小泉にあり、縄文時代、弥生時代、平安時代の遺跡が発掘された。竪穴住居址として、縄文時代68軒、弥生時代1軒、平安時代20軒が発見された。また出土した土器・石器・土製品は種類も多く、量も多い。

さらに弥生時代中期初頭の再葬墓が4群16基発見された。人骨を入れた土器棺は地元産を中心に東海地方や東北地方のものなどさまざまであり、当時の人々の交流の広さが伺われる。

第6章 大町市の遺跡

[前科郷のあった地域]

大町市の南部、社の松崎から七貴の押野付近までの地域は安曇郡前科郷に属していたと考えられている。この地域には弥生時代中期以降のいくつもの遺跡がある。

1) 古城遺跡 大町市社 松崎

縄文時代、古墳時代、平安時代の土抗とともに、竪穴式住居址が32軒検出された。そのほとんどが弥生時代後期のものであり、ほとんどの住居址に埋甕炉や石囲の埋甕炉があった。また方形周溝墓（弥生時代後期から古墳時代はじめ頃）の一部らしい溝が検出された。出土品として弥生時代中期および後期の多数の土器、石器類があり、刃痕のついたものも出土しているとのことである。

2) 中城原遺跡 大町市社 館之内

遺跡は古城遺跡のすぐ近くにある。住居址は破壊されたところが多く、4軒しか検出できなかった。しかし弥生時代中期において、環濠的な溝を伴った集落跡があったらしいとのことである。弥生時代後期前半には墓域的な性格が強くなり、集落の中心は古城遺跡の方に移ったと考えられている。そして古墳時代中期頃には集落はまた中城原遺跡の方へ移動してきたと考えられている。

3) その他

大町市社地区には弥生時代の遺跡として、この他に丑館遺跡、道ばた遺跡、堀跡遺跡、二本松遺跡、寺畑遺跡がある。

[村上郷のあった地域]

大町市の北部地域は安曇郡村上郷のあったところである。農具川べりには弥生時代、古墳時代、平安時代にかけての大きな遺跡がある。

1) 借馬遺跡 大町市大字社閨田

木崎湖の南端から流出する農具川の右岸地域に借馬遺跡がある。この集落は弥生時代後期から平安時代後期に至るおよそ900年間続いたもので、松本平最大の古代集落跡である。竪穴式住居址83軒、稲穂蔵と考えられる掘立式建物址34軒、その他多くの用途不明の竪穴、柵址、灌漑用水路の跡などが発見された。そのうち、弥生時代住居址が1軒あり、そこには炉があった。その炉は弥生時代後期の大型の壺の下半分とちがう甕の上半分ほどを重ねたものである。

2) 来見原遺跡 大町市三日町

弥生式中期から後期の土器、土師器、須恵器等が出土している。

3) その他

これらの他に弥生時代遺跡として、森城跡遺跡、コボレ沢遺跡がある。
なお、借馬遺跡近くには平東部古墳群と小熊山古墳群がある。小熊山古墳は積石塚古墳
であり、朝鮮半島からの渡来系人の墓と考えられている。この集落に居住していた人々
は、安曇南部の住民と異なる種族であったことが推測される。

第4編 安曇誕生の系譜の考察

〔「安曇」のはじまり〕

本稿では安曇平において水稲栽培がはじまった時点「安曇」誕生の時点と考えることにする。水稲栽培は弥生人によって安曇平へ持ち込まれ、始められた。従って、その弥生人の安曇平への進出時点が「安曇」誕生の時点である。

このような視点は、これまで郷土史家たちからはあまり重視されず、安曇氏の安曇進出の問題に焦点をあてた論議がなされてきた。安曇平の弥生時代および古墳時代にかけての歴史は多く語られず、結果として空白に近い状態になっていた。

しかし安曇平には多くの弥生時代遺跡があり、多くの弥生人が水稲栽培を行い生活していたことが分かっている。安曇の古代史を論じる場合、この弥生人たちの状況を抜きにしては語れない。

〔弥生人の安曇進出〕

弥生人たちが信濃国へ進出してきたのは弥生時代中期のはじめ、すなわち紀元前100年頃である。そして、伊那地域、松本地域、佐久地域、善光寺地域へ分布し定着した。さらに碓氷峠を越えて埼玉県、群馬県地方へも進出して行った。それから50～100年程度遅れて進出してきた弥生人たちもいた。彼等は松本地域にはすでに先着の弥生人たちが居住していたために、さらに先へ進まざるを得なかった。そして梓川を渡って安曇平へ進出したと考えられる。このことは黒沢川右岸遺跡の存在によって明らかである。この遺跡は弥生時代中期中葉とされており、前述の遅れてきた弥生人たちが安曇に進出したと考える時期と合致するのである。

しかし、黒沢川右岸地域は水稲栽培には適していなかったため、水稲栽培適地を探し、穂高町地域、池田町地域に進出し、そこで勢力を拡大していった。

〔安曇人の誕生〕

安曇平の弥生時代遺跡においては、弥生時代の遺物と縄文時代の遺物が混じりあって出土する例が多い。そのことから、当時において弥生人と縄文人が隣り合って、共同生活を行っていたことが分かる。当時の縄文人たちの生活は非常に厳しかったため、水稲栽培文化を吸収しようという強い欲求があった。先住民である縄文人は弥生人の到来を知ると、その近くに移住してきて、水稲栽培技術をはじめとして弥生文化を吸収しようとしたのである。そのような状況は、この頃の東日本地域では全般的に行われていたと考えられている。

そしてその結果、弥生人と縄文人との混血がなされ、やがて安曇人が誕生したのである。東北岩手のアバクチ洞穴から丁重に葬られた幼児の骨が発掘されている。その人骨は弥生時代のものであり、縄文人と弥生人の特徴を合わせ持っているとのことである。つまり混血が行われていたことの証である。弥生時代においては、東日本ばかりでなく日本中の各地において縄文人と弥生人との混血がおこなわれ、新たな日本人が誕生していたのである。「安曇」において誕生した安曇人はそうした日本人の一部である。

やがて、安曇平に定着し勢力を拡大して行った安曇人たちの中から、有力者が現われ、そして首長になっていく。その首長は矢原郷、前科郷、高家郷に相当する地域を支配していたと考えられる。

[安曇郡の成立と安曇氏進出の時期]

第2編で詳しく見てきたように安曇郡の成立時期は、4世紀後半から5世紀はじめと考えることが妥当である。安曇平にはこの頃「安曇」という有力者がいて、この地を支配しており、「安曇」という名前の県が成立していたと考えられる。その根拠として「信濃国安曇郡県首（あがたのおびと）」家の存在があり、また多くの関連史実がある。この見解はこれまで、郷土史家たちからは語られていないものであるが、合理的な推測であると考えられる。

すると、安曇氏の安曇進出は4世紀後半よりも以前でなければならない。現地に定着し勢力を蓄えるためには、長い期間が必要であることを考えると、3世紀以前の弥生時代と考えることが妥当である。

[従来の見解と安曇氏の経歴]

これまでは、安曇平が開拓された後の4世紀後半から古墳時代後期および奈良時代にかけて、安曇氏が外部から安曇平へ進出してきて支配下に収めたとする説が有力とされてきた。しかしこの説は、当時の安曇氏を取り巻く歴史状況から考えると成立しないのである。このことは第1編の郷土史家たちの論考において詳しくみてきた通りであるが、ここで再度安曇氏の経歴を整理しておく。

弥生時代のはじめに、中国大陸から渡来して北九州地域に定着した人々がいた。漁撈と水稲栽培農業を行っており、渡来人ないし弥生人と呼ばれている。安曇氏はそのうちの一族であり、福岡県糟谷郡安曇郷・志珂郷（志賀島地域）を本拠地としていた。彼等は素潜り漁を得意としており、海人族と呼ばれている。海人族と呼ばれる人々は他にもいたのであるが、安曇氏はその中で最有力とされている。

安曇氏は西暦57年に中国へ朝貢し「漢委奴国王」の金印を授与されたと考えられている。これは、邪馬台国の卑弥呼よりもっと古い時代のことである。史実による裏づけがなく信憑性に欠けることであるが、日本書紀に神功皇后の命により新羅へ出征したこと、応神天皇により海人の宰に任じられたことなどが記載されており、大和政権と強く繋がっていたと推測される。しかし401年には住吉仲皇子のクーデターに加担し、結局敗れて、罰せられてしまう。この時以来、安曇氏は政権の表舞台からは姿を消すのである。

それから長い時が経過し、推古天皇（593～623年）の時代になってようやく日本書紀の記述に現われる。つまり400から500年代（5～6世紀代）においては、安曇氏は朝廷に対する反逆者として政治の裏舞台でじっと雌伏していたのである。その様な時代に、大和政権の先兵となって東国征討へ向かうことなどとうてい考えられないのである。そして同様に、安曇郡へ進出するということも考えられない。

なお、安曇氏は推古天皇以降においては政権の中枢に復帰し、活躍するようになる。例

えば安曇比羅夫は662年頃、百済との外交において活躍している。安曇氏の活躍は、奈良時代の792年に安曇継成が詔命をうけず人臣の礼なしとして佐渡に配流されるまで続いた。

[安曇の弥生人と安曇氏]

以上の考察によると、安曇氏は弥生時代から安曇平に定着していたと考えざるを得ない。すると安曇の弥生人および安曇人と安曇氏は重なってくるのである。すなわち、安曇平にはじめて進出した弥生人たちこそが安曇氏なのである。彼等はその後縄文人と混血し、安曇人となり、そして現在の安曇人へ発展してきたのである。これが、本稿の安曇誕生の基本命題である。

これは、かつて大場磐雄氏と宮地直一氏が指摘した見解であり、その後の小穴芳実氏をはじめとする郷土史家たちからは見捨てられていた見解である。しかし、安曇の弥生時代遺跡を冷静に評価すれば、必然的にこの基本命題にたどり着くのである。

[おわりにあたって]

地方史においては文献史料は極端に少なく、考古学的史料も少ない。そのためにあいまいなままになっている。町村毎に町誌・村誌が編集作成されており、そこに歴史が記載されているが、それぞれ独自の見解に基づいて歴史を語っている。その結果、内容として食い違っている部分もある。中には、章が異なると辻褄が合わなくなるものもある。安曇野市として統一見解を構成し、それに基づいて古代史を記述して欲しいと思う。

本稿において、これまでの郷土史家たちの研究成果や史料を勉強しつつ、私なりの視点から安曇誕生の系譜を考えてきた。この課題は史料の乏しい古代のことであり、どうしても推測が多くなってしまう。

また、三郷村の住吉神社のこと、穂高の古墳群のこと、高家郷の位置はどこか、明科はどの郷だったか等々残された課題が多い。これからも史料を勉強し考察を広げていこうと考えている。

最後に、安曇には卑弥呼の時代よりも古くからの、2千年におよぶ壮大な歴史ロマンが眠っているのである。安曇平および松本平の人たちの間で安曇誕生の系譜に関する論議が巻き起こり、眠っている歴史ロマンが発掘されることを期待するものである。

(平成18年10月「安曇誕生の系譜を探る会」 代表 金井 恂)